嶋村　克，山内豊太郎著

『「雨のち曇り，ときどき晴れ」のサイエンス』

PHP 研究所，235ページ，1,200円

気象には，日常生活に身近な部分とそうでない部分がある．テレビの天気予報，それに加えられる気象の解説，新聞の天気コラムなどは前者である．気象の原理，気象観測や予報の技術などは後者である．一般読者を対象にした気象の本といえば，つい，前者のイメージをもってしまう．たとえば，倉島　厚著「暮らしの気象学」（草思社）というような本である．一方，後者の内容は，気楽に読む本にはまとめにくい．どうしても，教科書的になるか，技術解説書のようになるだろう．さて，本書の特徴は，前者のようなふりをして，実は，後者を主題にしていることである．この点において，非常にユニークな気象の本というべきである．

本書の内容は，

第1章　雲のふしぎ不思議
第2章　気象は太陽の贈り物
第3章　台風は自然界のやんちゃ坊主
第4章　異常気象が地球を襲う
第5章　TV の天気予報を楽しもう
第6章　気象情報の正確さを求めて

の6章から構成されている．各章は，それぞれ，6～10程度の独立した話題から構成されている．それぞれの話題は4ページ程度でまとめられており，それぞれ完結した話なので，どこからでも読み始めることができるようになっている．このような構成や，書名，章の表題は，いかにも本書を気楽に読める印象を与えるが，内容は相当に高度なものである．前書きによれば，「多くの本は，基礎的なことを浅く広く書くか，専門的なものを深く狭く書いたものが多い．……2人の著者は気象庁に在職し，異なった分野を歩いてきたので，それぞれ，自分の扱ってきた分野について書けば，面白いものになるのではないかということになり，かなり広い分野を分担して書くことにした．内容的には，あえて，“浅く広く”と“深く狭く”の中間，すなわち，ある程度広く，ある程度深くというところに挑戦してみた」そうだが，その試みは見事に成功していると思う．広く深く書くことは至難の業と思うのだが，2人の著者の呼吸がぴたりとあって，それを実現している．天気予報や台風は嶋村氏が，物理気象は山内氏が担当されているが，お2人共，気象とのつきあいが長いので，著者が自分自身の問題として深く考えていた内容が行間からにじみ出ている（夏至の頃に気温がなぜ最高にならないのか，山内氏は小学校5年の理科の時間以来，何年も悩んだそうである）．

私は，各項目の説明がとても具体的で定量的であることに興味をもった．例えば，火山噴火が日射量に与える影響を説明する項目では，日本各地のボイスナー・デュボアの混濁係数の月最小値の経年変動とそのアノマリーの経年変化が示されている．この図からエルチチョン火山噴火の影響を定量的に読みとることができる．温暖化の項目では，日本各地の年平均気温の経年変化が示されている．この図を見ると，温暖化が都市域ではっきりしており，都市から離れた地点では，「気温は40年間，ほとんど，上昇していない．」社会的に騒がれていることを単に紹介するだけでなく，著者が自分の目で確認したことを述べているので説得力がある．このような態度こそ，まさにサイエンスである．

「西谷・東谷」，「吹上型」，「お辞儀型」，「強制晴れ」など，予報官の使う独特の用語の解説があるのも楽しい．どの用語も，予報をはずしやすい状況を指すもので，予報をはずした悔しさがこめられているそうである．著者の実感がこめられた解説である．また，天気予報で「明日は晴れ，明後日は雨」というときの「明日」は明日の午前6時から始まり，「明後日」は午前0時から始まることも教えられた．

著者は「気象に関して特別の知識がなくとも楽に読めることを第1の目標にして書いた」そうだが，内容はかなりマニア向けのものであり，気象学会員が読むのに適した本のように思った．本書を読めば，かなりの気象通になりますよ．

（東大海洋研究所　木村竜治）